

「大切な伝統」

校長 齋藤 滋

八時二十分、それはどの学級でも朝の会が始まる時間です。八時十五分の時計の針を見た子どもたち、まわりの子どもたちが校舎内に入っていく様子を見た子どもたち、みんなが始業時刻に遅れることなく教室に向かいます。そこには「急ぎなさい！」という教員からの声かけはありません。これが桐光学園小学校の自慢できる一つの伝統です。長い年月をかけて作り上げた大切な伝統です。朝の会が始まるころの校舎を歩いていると、教室からは元氣な挨拶、歌声、ときに笛の音も、そして「今日の目標は・・・」という声も聞こえてきます。子どもが、一生懸命にスピーチをしている姿とそれを真剣に聴き質問をする子どもたちの姿も見ることが出来ます。スピーチを考えることに時間をかける子どもいると思いますが、クラスの仲間の前で発表できるチャンスがありますから、準備にかけた時間以上のものを得ることができると思っています。もしスピーチの準備をしている様子を見かけたら自分の力で準備できるように応援してあげてください。

さて、ある先生の本を読んでいたところ、「しつけ」ということについて考えさせられることがあります。辞書によると「礼儀作法を教え込むこと」「新しく仕立てた着物が崩れないように、縫い目、縁などの大切なところを仮に縫いつけておくこと」などの意味が書かれています。そして、大切なことは、しつけに使われた糸は着物が出来上がるのと同時に抜き取られることです。人に大切なことを教えるという意味での「しつけ」においても、その目的は、子どもが将来立派な人になるよ

うにとの願いを持って子どもに接するということであるはずですが。そのときに願いが通じて子どもが少しずつ成長していくためにも、他との無意味な比較などをせずに寄り添ってあげたいと思います。子どもとの向き合い方は様々です。学校でも子どもに直接「こうあってほしい、こうあるべきだ」と伝えることがあります。また、自分がしていることを見ている子どもたちが何かを感じ、そして考えてくれることがもしもあればそれはそれでいいかとも思います。ご家庭でも、親の背中から学ぶことが多い子どもたちだと思えます。皆さんがきっとそうだったように。

「二年生の子どもたちから学んだこと」

教頭 馬場 淳

後期は産休に入る教員が出た関係から、私は一年一組の朝の会や昼食に参加することが増えました。一年生の授業を持ったことがない私にとつて、一年生と過ごす時間は新しい発見の連続で、毎日とても勉強になっています。

一年生と接する中で特に驚いたのは、人との距離の縮め方です。朝、教室に入った瞬間に「先生、おはようございます！」と言いながら、「先生の手は温かいね。」と手を握ってくる子がたくさんいました。海外では、会った人と握手して挨拶するのは当たり前のことだといえます。日本人にはなかなか浸透していないように思いますが、現代のグローバルな社会においては、身につけなければならぬ習慣の一つなのかもしれません。私も普段、手を握るような挨拶をすることはなかったのですが、最初はとても戸惑ったのですが、一年生の子どもたちには何の躊躇もありませんでした。国

際社会においては、すでに一年生の子どものためのほうが、一歩も二歩も進んでいるのかもしれない。話が少しずれてしまいましたが、この握手や挨拶が、私と一年生の距離をすごい速さで縮めてくれたように感じました。

私たちは、子どもたちに指導をする上で、子どもたちとの距離を適度に縮めておけるように、常に意識して指導に当たっています。もちろん、その距離を縮めすぎて友だちのようになってしまつては元も子もありません。しかし、教師と児童という関係において適度に距離を縮め、信頼関係を築くことは、指導できる内容を広げ、子どもたちの学ぶ姿勢や意欲を育てることに繋がります。

人との距離を縮めるには、基本的に互いをよく知ることが大切です。そして、一緒に過ごしたり、言葉を交わしたりすることが、お互いを知ることにつながるのだと思います。しかし、一年生の子どもたちはそのような時間を設けることなく人を信頼し、距離を縮めて接してきました。あまりに簡単に人を信じてしまうことは危険を伴うことがありますから、ずっとそのままよいということにはならないかもしれませんが、それはきっと素敵な家族や友だちに恵まれていたからに違いありません。

本校の子どもたちは高学年であっても、基本的には今回の一年生と同じような側面を持っています。そのことを考えると、「この子はどんな子かな？」と慎重にその子を捉えようとするところから入るのではなく、あまり身構えずに子どもたちとの距離を縮めていったほうがよいことも多いのかもしれない。子どもたちの素直な思いをまっすぐ受け止め、大切に育てていきたいと、改めて思いました。

平成二十八年年度 各学級 一年間の振り返り

今年度の初めの学校だよりで各学年の目標を紹介しました。今回は、一年間を振り返り、これまでの成果をご報告致します。

★一年一組★

友だちのよい所を素直に受け止め、それ自分の力にしようとする姿勢が、子どもたちの成長の原動力となりました。その結果、自分たちで考えて行動をしたり、自分たちの考えをクラスに提案したりする場面が多く見られ、自分たちの力でクラスをよりよくしてきましたことで、クラスに対する愛着も湧いてきました。また、子どもたちの思いやりある行動が、クラスに和やかな雰囲気と安心感を与えていました。発表会前日に、明日の欠席が決まった友だちの存在を知ると、子どもたちからの提案で、その子に手紙を書きました。「来年、一緒に発表会に出よう」など、言葉の一つひとつに優しさを感ずりました。「個の高まり」と「思いやり」が、クラスの力になりました。(蒲谷誠一)

★一年二組★

学級では、この一年間「いいと思うことを自分からする」「友だちの意見を大切にすること」「ありがとう」や「ごめんねさい」をわすれずに言う」の三つの目標を意識して、生活してきました。これまで学んできたことや、友だちの素敵などと思う発言や行動を、帰りの会の「いいところ見つけ」で共有する中で、いま自分が何をすべきか、自分だけでなく周りの人のために何ができるかということを考えてられるようになってきました。また、授業に限らずさまざまな場面で、相手の意見を聞くときの姿勢や、どのような返事をする

と意思の疎通ができるかということも学んできました。今後はさらに、自分から感謝の気持ちを手伝いに伝えられるようになってほしいと考えています。(大木葉々絵)

★二年一組★

子どもたちとともに生活する中で、特に印象深かった出来事があります。それは、算数のかけ算九九で取り組んだ「九九マスター」です。得意な子、苦手な子、それぞれでしたが、どの子も一生懸命取り組んでいました。また、早い段階で合格した子たちが、覚えるのに苦労している子に寄り添い、一緒に九九を唱えている場面がたくさん見られました。自分だけではなく、クラスみんなのできるようになりたいという気持ちが感じられ、二年一組の優しくあたたかい雰囲気は伝わってきました。一人ひとりの成長はもちろんです。が、お互いを認め合い、高め合える仲間と過ごすことで、クラスの成長を感じた一年間となりました。(森山沙也加)

★二年二組★

今年度のはじめ、校訓を基に三つの目標を立てました。「やらなければならぬことをやり遂げ、好きなことに夢中になれる子」「相手のことを考えた挨拶や丁寧な言葉遣いができる子」「周りの友だちや生き物を大切にできる子、友だちや世話になってる人に感謝できる子」です。それぞれの目標を月ごとに振り返り、自分がその目標にどこまで近づけているかを考えてきました。最初の頃は、「まだまだだな」と言っている子どもたちがいましたが、少しずつできることが増えていき、目標とする子に近づいていく子どもたちを傍で見守ることができました。子どもたちの中には、「まだ足りない」と考える子どもも多く、できることを増やしたいと臨んでいる子どももいます。来年度、さらに成長していく姿を楽しみにしています。(尾崎成美)

★三年一組★

この一年間、子どもたちのクラスへの声かけがよく聞こえてきました。なかなかかけがつけられないクラスへ改善を呼びかける声、係活動のイベントへ誘いかける声、「みんな、がんばろうよ」と励まし支え合う声。いろいろな子どもたちの思いがクラスの中で聞こえてきました。日々、生活をしていく中で様々なことが起こります。良いことも、がっかりしてしまうようなこともあります。そのような時にでも仲間の声を傾け、クラスをよくしていこうと協力し合えたのは大きな成長でした。一月から毎日小さな目標を立て、全員で達成することを頑張っていました。課題と向き合い、考え行動していく先には、子どもたちの「できた!」という笑顔がありました。(馬渡絢子)

★三年二組★

年度初めは、初のクラス替えに緊張した面持ちだった子どもたちも、すっかり打ち解け、笑顔の多いクラスになったように感じます。誰かのために進んで動ける子どもたちが多く、またそうしたよさを互いに認め合う機会もたくさんありました。クラスには自己肯定感が生み出される雰囲気があったように感じます。逆に、自分たちの課題を見出せていないような面もあり、そうした際にはこちらから気づかせることもありました。「聞く」「切りかえ」「思いやり・敬意」の三つのワードは度々登場しましたが、子どもたちなりに守るべきこととして意識していたように思います。失敗の経験から学び、成長していく子どもたちとこのクラスが、来年度どのような変化を見せるのか楽しみです。(浅利直樹)

★四年一組★

この一年間、「二人ひとりが主役」「共に認め合い、学び合う」を合言葉に、日々様々な取り組みに挑戦してきました。特に、「褒め言葉のシャワー」は子どもたちからも好評で、主役となる日を心待ちにしている子や友だちの新たな一面に気づかされる子もいるなど、クラス全体で温かい雰囲気共有できた素晴らしい機会となりました。また、年度末には、クラスの友だちといられた時間を大切にしよう、係で楽しいイベントの企画を立てる姿や男女仲よく遊びに誘い合う姿も見られました。進級当初に比べ、クラスや友だちのためにできる事を考えて行動できるようになったところは、大きな成長の一つです。来月からは、いよいよ高学年の仲間入りを果たし、学校全体の運営や下級生を引っ張っていく立場となります。新しく始まる学校生活の中で、主体的な行動を取りながら躍動する姿に期待したいです。(鈴木健太郎)

★四年二組★

一年間の子どもたちとの生活を振り返ってみると、みんな笑ったり泣いたりすることの多かった一年でした。嬉しいことも悔しいことも、感動することもみんな分かち合っていて共有してきました。運動会の四人五脚ではリーダーを中心に自分たちで練習に励む姿を頼もしく感じたことを覚えています。昨年度までの子どもたちとは違う、そう感じた瞬間でした。四年二組の子どもたちとても素敵だと思ふことの一つに、悪いことも正直に打ち明け、認め合い、みんなが変わろうとする姿勢があることだと感じています。失敗をも認め合える仲間、それは強い絆で結ばれた仲間です。これからも、お互いを高め合える関係を大切に生活してほしいと思います。(石井香菜子)

★五年一組★

「自主・自律」この一年、自律に関する指導を中心に行ってきました。自分たちの生活を自分たちでつくっていく時には自律ある行動が不可欠だと考えています。時計を見て行動する、話を最後までしっかりと聞く、手を挙げて質問するといったことは四月に比べてできるようになってきました。五年生としてもう少し頑張ってもらいたいと思うようなこともまだありますが、一歩ずつ改善されている様子を見て、嬉しく思いました。また6年生を送る会では五年生が中心となって企画を進めていきました。その中でよりよい会にしていこうと積極的に話し合いを行い、たくさん意見を出している姿に頼もしさを感じました。人任せにすることなく積極的に活動に参加する姿勢は六年生になっても大切にしていきたいです。(新井航)

★五年二組★

学級目標「高学年らしいクラス 元気・笑顔・努力・思いやり」をみんな決めてから一年が経ちます。この一年間、定期的に個々の達成度や課題を振り返ったり、学級会で話し合ったりしてきました。そんな姿を見てきて、改めてよさも課題も表裏一体であり、どちらも経験しながら成長していくものだと感じました。例えば、子どもたちの「元気」のよさは、休み時間だけでなく授業においても見られます。積極的に発言するよさがある反面、思いをつぶやきすぎることがあります。でも、この両面があつてこそ、その先の成長を見据える楽しさがありました。課題があつてこそ成長、成長することで見えるよさ、またそこから見える課題、子どもたちとともに考え進んできた一年間でした。まだまだ課題はありますが、伸びる可能性をたくさん秘めている子どもたちです。四月から最高学年として学校を支えていく姿を見るのが今から楽しみです。(佐藤浩太郎)

★六年一組★

「見本」低学年の見本となろう。地区別集会、兄弟学年の活動など様々な面で六年生としての役割をしっかりと果たして行きました。口だけではなく、率先して自分から動くことで、よいお手本となつていたと思います。また、廊下のマナー向上を達成したことも、六年生として全校に手本を示そうとしたことのひとつだと思います。「笑顔」笑いの絶えないクラスにしよう。楽しいこと、新しいことをやるのが大好きなクラスです。クラスレクをしたり、週に一回は放課後に「増えおに」をみんなで作るなど、全員で同じ楽しい時間を共有することができました。日直が定める一日の目標でも「笑顔いっぱいの日にする」というような目標が立てられることがありました。

★六年二組★

「敬意」敬意を持つて接しよう。他者を大切にすることが自然とできる子どもたちです。中学校でも、多くの人と関わるとは思いますが、このことはいつまでも変わらぬ思いだと思います。(福富直史)

「行動する時のひと工夫」：今年度の学級目標に掲げられていた言葉の一つで、クラスのよさを最も表しているものだと思います。「少しでも嬉しい気分になつてほしくて、係活動の当番カードにひと言やイラストを残しました」と年度末にある子が振り返っていました。カードと一緒に「明日がんばつてね」という気持ちや伝わったことと想いが何かをしようという思いに変わります。そして今度は、他者の気配りに気づくようになります。毎日が、子どもたちのさりげない優しさがあたたかく感じられる教室でした。卒業後には新しい出会いが待っています。仲間と共に育まれた強くてしなやかな心を大切にしながら、身近な人の心に気づき誰からも愛される人でありたいと思います。(猪狩裕亮)

活動◇紹介

日頃の様々な活動において、実際の実践を厳選し、そこでの様子や指導のねらいなどをご紹介します。

宿泊行事について

本校では、1期生が3年生になった1998年の7月にサマーキャンプが、5年生になった2001年の2月にスキー教室が始まりました。

最初に行われたサマーキャンプは、自然の中で心身ともに鍛えること、子どもたちが自分たちの力で生活する中で集団におけるルールやマナーを身につけることを目的とし、埼玉の秩父で行いました。2007年にはより充実した活動を目指し、場所を塩尻に移しました。秩父では行うことができた川遊びはできなくなってしまいましたが、森林散策や木工体験、高ボッチ高原へのハイキングなど、より自然を感じられる活動を増やすことができました。

スキー教室は、スキーというスポーツに親しみ、規律ある集団生活を送り、自然の中で心身を鍛えることを目的として行いました。当初訪れていた白樺湖のスキー場は、リフトが三本しかない小さなものでしたが、教員が子どもたちの様子を把握するにはとても便利なゲレンデでした。2008年からは現在も訪れている菅平へと場所を移しました。スキー場の規模が大きい分、経験豊かなインストラクターを手配しやすい点と様々なコースを完備している点で優れていたことが、宿泊場所変更の大きな理由となりました。どちらの行事も開始当初からの主な目的はさほど変わっておりませんが、活動の充実を図る中でその目的の幅は広がりました。ここ数年は異学年交流の場を増やし、それも大切な目的の一つとして位置づけ、活動してきました。これからもより充実した活動を目指していきたいと思えます。(馬場 淳)

劇指導「劇団 風の子」

発表会では4・5年生の発表に表現「劇」があります。昨年度より学芸会アドバイザーとして劇団「風の子」の大潤さんに来校していただき、1時間だけですが劇の指導を受けています。発表会時間割が開始され、子どもたちは自分たちで役の個性や台詞の感情の表現方法を考え、それがある程度形になった段階でこの時間を迎えています。大潤さんの口からは、私たちが思いつかない表現方法がたくさん出てきます。舞台や小道具の使い方、感情を上手に台詞にのせるための工夫など、「さすが演劇のプロ」と感心させられるばかりの時間となりました。さて、劇は創り上げる過程が本当に楽しい活動です。役の個性・台詞の感情を台本から自分なりに読み取り、それをどう表現していくか周りの友だちと知恵を出し合い、時には友だちと意見がぶつかることもあります。工夫しながら創り上げていきます。「喜ぶ」感情一つにしても多くの表現方法があります。子どもたち一人ひとりの個性が感じられる、そんな劇を創っていきたくて考えています。(新井航)

